

開催地名：大阪府大阪狭山市	
開催日時	令和2年1月18日（土） 10：00 ～ 11：30
開催場所	大阪狭山市立コミュニティセンター
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	市民 約60名
開催経緯	本市は、南海トラフ巨大地震発生時、震度6弱が想定され、上町断層帯による直下地震では、震度7が想定されている。しかしながら、過去に大きな災害経験等がなく、災害についての意識高揚や防災への取組みの推進に苦慮しているところである。発災時の避難所運営等については、避難所ごとの避難所運営マニュアルを策定する動きが一部地域で見られるとともに、自主防災組織代表者から避難所の実態を知りたいなどの要望があり、関心が高くなっている。
内容	（１）地震から身を守るために 私は、仙台市太白区茂庭台5丁目の町内会総括防災部長であり、東日本大震災直後から指定避難所の責任者を17日間務めた。現在防災教室を全国で開催している。 大地震はいつ起こるか分からない。小学生であれば登下校時ということも考えられる。揺れから身を守るためにランドセルを頭にのせる、と答える児童が多いが、それだけでは足りない。たとえばブロック塀は道路側に倒れるようにできている。頭だけでなく背中もガードしないといけない。下校時に地震に遭遇したら、うしろに手を回してランドセルの金具をはずし、肩のほうからふただけを頭にかぶせる。そして体操座りすることで全身を守ることができる。また寝ているときに発震したら、“ダンゴムシ”になることだ。立ってうろうろせず、布団をかぶって丸くなる。枕元には、靴下、スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー、イヤホン付き携帯ラジオ、雨用カップの6点セットを入れた防災袋を日頃から置いておくといい。 （２）小・中学生が活躍した避難所生活 私は震災時、17日間指定避難所の責任者を務めた。その体験から提案したいことがある。それは避難所で小・中学生に役割を担ってもらうことである。そのためには普段から防災訓練に彼らを参加させることが必要である。東日本大震災が起こったとき、地域には高齢者と小・中学生しかいなかった。しかし避難所はすぐに開設しなければいけない。避難所でも会社員や高校生は早朝から通勤・登校してしまう。運営には彼らの力が必要だった。 避難所で、小・中学生は大活躍してくれた。震災当日、私が一時避難場所にいると、中学生が走ってきた。「避難所の準備ができたので避難してきてください」

とのことだった。行ってみると、中学生が自らのアイディアで避難所の床に柔道用の畳やマットを一面に敷いて私たちを迎えてくれた。

そのあと、避難所内では必要事項の掲示やごみの分別など、小・中学生が自発的にアイディアを出し合って行ってくれた。毎朝、避難所を掃除してくれたのも小学生である。

自衛隊の救援物資が届いたときも彼らは率先して動いてくれた。自衛隊はその場に物資を下ろすだけで運んでくれない。中学生が救援物資を運び、きちんと種類別に重ね、台帳に記入してくれた。

水の配達にも彼らは活躍してくれた。小学生がプールの水をバケツで汲んでポリタンクの中に入れる。それを高校生と大学生がトイレ用の水としてマンションの上層階に配達するのだ。エレベーターは停電で止まっているし、ポリタンクは1つ18～20キロある。マンションは高いところでは30階もあり、上層階に高齢者が多く暮らしていた。

このような経験から、私は年少者への防災教育は非常に重要だと実感した。いざというとき、彼らは大きな役割を担ってくれる。防災訓練の担当者をお願いしたいのは、地域の避難訓練や避難所設営訓練にぜひ児童・生徒を加え、受付や設営、炊き出しなどを体験させてほしいということである。



開催地より

当市は、阪神・淡路大震災を経験しているが、25年が経過し、当時の記憶が薄れつつある。講演を聞き、改めて、地震の恐ろしさや個人や地域として取り組むべきことについて認識する貴重な機会になったと思う。